



自由と進歩  
法政大学

人間環境学部

Faculty of Humanity and Environment

2014

# フィールドスタディ報告書

— 五感で感じる学びの旅へ —



現場での「学び」が、  
あなたを成長させる



# フィールドスタディのすすめ

フィールドスタディは、人間環境学部の特徴ある教育の一環として、学部設立以来続けられてきたユニークな学習プログラムで、毎年多岐にわたるテーマで実施しています。キャンパスを飛び出して現場を訪ね、実体験や、様々な取り組みを行っている人と直接意見交換することなどを通して、多くの生きた知識と経験を得ようというものです。同じ地域で毎年継続して行うコースや、ひとつのテーマのもと毎年訪問地を変えるコースなど、国内外あわせて毎年20コース前後の多彩な企画で展開されています。

フィールドスタディは1年生から参加できますので、異なる学年による交流の場でもあり、現場を通してひとつのテーマに挑むという学年を超えて共有される至極の時間を創作する活動でもあります。同時にそれは一生の思い出となる何にも代えがたい楽しい時間でもあります。

フィールドスタディでは出発前に目的に沿って事前学習を行い、その過程で湧いてきた疑問を現地で確かめ、膨らんだ関心を現地で学習に昇華させることにつなげていきます。戻った後は事後学習として現地で実感し直に関係者から学んだことを各自のテーマに沿ってまとめます。

人間環境学部では、持続可能な社会の実現を目指してさまざまな角度から人間社会と自然環境に関する理解を深め、環境問題を学際的に捉えるカリキュラムが用意されています。また、関心分野をより掘り下げるための研究会（ゼミナール）も2年生から参加することができ、学生がみずから学び、考えることを目指した体系が設けられています。

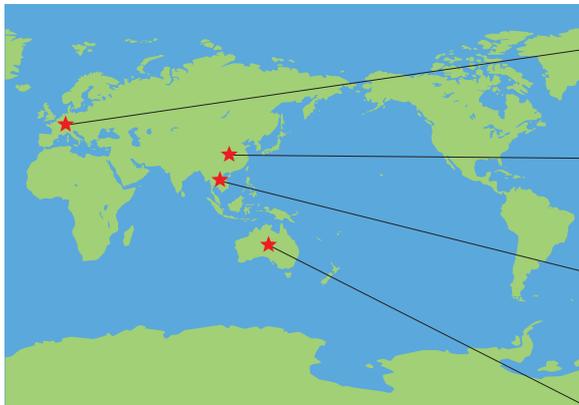
その要にあるのがフィールドスタディといえるでしょう。教室での学習だけでは気づきにくい問題を発見し、講義科目での学習や日常生活での見聞をとおして漠然と抱えている問題意識を、具体的ななかたちで実感することが、フィールドスタディの重要な目的でもあるのです。

そうして練りあげられた問題意識を、専門的な講義科目をとおして多面的に検討したり、各自の所属する研究会（ゼミナール）のなかで具体的な課題に落とし込んで探求していくことで、フィールドスタディの経験がさらに活かされることとなります。まずは試しに、一歩別世界に踏み出してみませんか。



# Field Study Map

## 2013-2014



**ドイツ** (フランクフルト・アム・アイン～ライン・ルール地方) …P4  
ドイツー環境と健康のまちづくり



**中華人民共和国** (内モンゴ自治区、西安市、北京市) …P6  
フィールドスタディ 中国 黄河流域  
ー黄土高原の砂漠化防止と、歴史都市の文化、都市環境を学ぶー



**カンボジア王国** (プノンペン、シェムリアップ) …P8  
開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る  
ー内戦の遺産と現代カンボジア社会ー



**オーストラリア** (クィーンズランド州) …P10  
オーストラリアン・フィールド・スタディ(AFS):  
英語と自然環境保護を学ぶ

**北海道** (利尻島) …P13  
国立公園の魅力を支える地域活動にふれる

**青森県** (五所川原市、中泊町、十和田市) …P15  
津軽半島をむすぶまちづくり

**青森県** (青森市、黒石市、弘前市、板柳町) …P16  
青森県におけるりんご産業から地域特性を活かしたビジネスモデルを学ぶ

**新潟県** (上越市) …P20  
ブナの森から農業と農村を考える (吉川IFS)

**山梨県・千葉県** (富士河口湖町、小菅村、香取市) …P24  
持続可能な地域社会への挑戦!  
～世界遺産のまち、過疎の山村、  
小都市の歴史的町並みを手がかりとして～

**長野県** (飯田市) …P26  
環境と文化の都市・飯田のまちづくり、  
地域の伝統芸能と社会

**鹿児島県** (奄美大島) …P33  
奄美大島の自然環境・  
地場産業・歴史文化を学ぶ

**北海道** …P14  
すぐれた自然の利用と保護の  
バランスを考える

**宮城県** (石巻市) …P18  
被災地のレジリエンス形成に  
向けての支援活動

**群馬県** (安中市) …P21  
障害者福祉の体験

**埼玉県・神奈川県**  
(川越市、小田原市、箱根町) …P22  
歴史的環境の保全を考える

**東京都** …P27  
東京いー散歩

**東京都** (日暮里) …P28  
演劇ワークショップ:  
インプロヴィゼーションを学ぶ

**東京都** (吉祥寺) …P29  
演劇ワークショップ:  
「スキットレーニング・メソッド」を学ぶ

**東京都** …P30  
科学博物館で学ぶ

**東京都** …P31  
科学技術と環境

**東京都** (伊豆大島) …P32  
伊豆大島の魅力発見  
～フィールドワーク事始め～



# ドイツー環境と健康のまちづくり

担当教員名 辻 英史・朝比奈 茂

## 1 コースの概要

日 程	2014年3月9日～16日
場 所	ドイツ（フランクフルト・アム・マイ ン～ライン・ルール地方）
参加人数	21名

## 2 コースの目的

「環境大国」として知られるドイツ。そのまちづくりの現状を学び、日本への応用の可能性について考えます。

今回は、とくに地域の再開発をテーマとして訪問先を選びました。さらに、エネルギー・防災・健康といった日本でもアクチュアルな問題にも注意を向けました。

## 3 事前学習

計6回実施しました。第1回ではドイツの歴史や現状についての概要を（11/9）、第2～4回では訪問先の都市および施設の解説を（11/27、12/14、2/4）講義形式で聞いたのち、参加者は各自の関心に基づいてテーマを選び、調べた内容をレポートにして提出します。さらに、レポートをもとにグループワークをおこなって知識と理解を深め、第5回ではその成果を口頭発表しました（2/20）。第6回では、グループごとに訪問先での質問事項を用意し、発表しました（2/26）。

## 4 行程

### 1日目

成田空港集合、KLM オランダ航空にてアムステルダム空港経由フランクフルト空港着、バスで宿泊先のユースホテルへ。

### 2日目 フランクフルトのまちづくり

大都市フランクフルト市の発展政策について、都心および社会問題多発地区の再開発・外国人市民の統合政策に関して市役所の担当者からレクチャーを聞き、続いて実際の現場見学をおこないました。

訪問先① フランクフルト市役所

訪問先② フランクフルト中央駅前再開発地区

訪問先③ フランクフルトの社会都市「ガルス」

### 3日目

フランクフルトからボン市に移動し、エネルギー政策と防災対策に関わる国の役所を訪問しました。

訪問先④ 連邦ネットワーク監督庁

電気だけでなくガス、インターネットなど、あらゆるネットワークを管理する連邦の役所で、ドイツのエネルギー政策、特に電力ネットワークの現状と将来についての話を聞きました。

訪問先⑤ 連邦危機管理庁

自然災害から原子力事故まで、広域に被害が及び災害の対策を準備し、救助の指揮に当たる連邦の役所で、ドイツの防災の仕組みについて、災害救助にあたる専門組織である技術支援機構からも説明がありました。

### 4日目 ルール地方

石炭と鉄鋼生産の中心地としてドイツの経済を支えたルール地方の歴史と現状について学びました。

訪問先⑥ ドイツ鉱山博物館

炭鉱の構造、石炭の採掘と運搬、そこでの労働の様子について実物と同じ坑道の中に入り、説明を聞きました。

訪問先⑦ クルップ博物館

エッセンで製鉄所を設立し、世界を代表する製鉄会社の経営者となったクルップ一族の邸宅を訪問しました。

訪問先⑧ ツォルフェライン炭鉱・ルール博物館

1986年まで使われていた炭鉱の施設が世界遺産としてそのまま保存されており、その一部であるルール博物館で、ルール地方の歴史、文化、日常生活、環境問題など、さまざまな発展の模様について解説を聞きました。

### 5日目 エムシャーパークの地域再開発

ルール地方の中心部に位置し、現在は大規模な再開発がすすめられているエムス川流域一帯（エムシャーパーク）を視察しました。

訪問先⑨ ボットロップ市産業センター

炭鉱都市から再生可能エネルギーへと転換を図るボットロップ市の温暖化ガス削減プロジェクトについて、市長からレクチャーを聴きました。

訪問先⑩ エムシャーパークの各施設

炭鉱関連施設の観光資源としての再開発の例として、ボタ山に作られた展望台や浄水場跡の公園を見学しました。また、エムス川の再自然化プロジェクトについて、実際に作業がおこなわれている現場でレクチャーを聞きました。

### 6日目

訪問先⑪ サッカークラブ・バイヤー・レーバークーゼン見学



ツォルフエライン炭鉱



フランクフルト・レーマー広場



テトラエーダー展望台にて



レーバークーゼン・スタジアムにて

ケルン市に移動し、オプション・プログラムとして、近郊のレーバークーゼン市にあるブンデスリーガを代表する強豪チームのスタジアムおよびトレーニング・リハビリ施設を見学し、ドイツ社会におけるスポーツのあり方を学びました。

### 7日目

ホテルからバスにてケルン・ボン空港へ。KLM オランダ航空にてアムステルダム空港経由日本へ。翌日早朝成田空港に着きます。

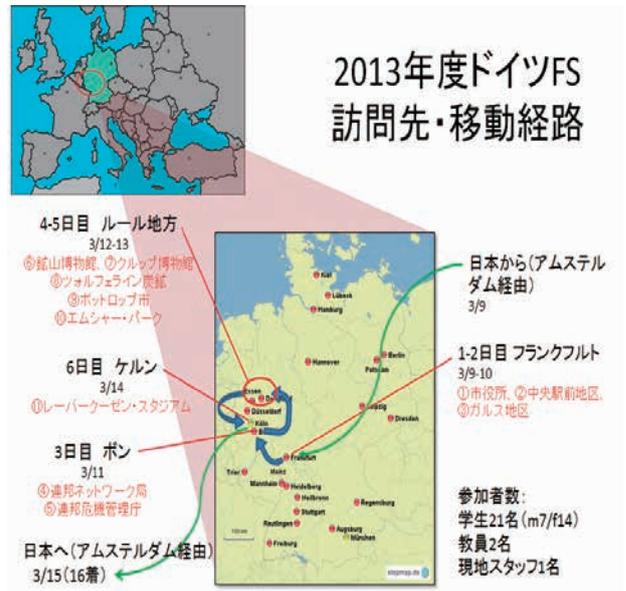
## 5 事後学習

帰国後1回開催しました(4/3)。グループごとに各訪問先で得た知識や印象を整理し、各グループ30分で報告します。その後最終レポートを提出しました。

## 6 雑感

ポスト工業化時代の地域発展や再開発、エネルギー問題、防災、さらに健康とスポーツに至るまで、ドイツが取り組んでいる課題は、日本と多くの部分で共通しています。しかし、このFSで見えてきたように、試みられている対策は2つの国でかなり違う。そのことを理解するためには、ドイツだけでなく、日本についても、社会の過去から現在までのあゆみの特質を理解することが必要です。

参加者の皆さんがこのFSでの体験を、今後の学習に活かしてくれることを望みます。



## 学生の声

### 「ドイツFSを体験して」



2年 小林美稀

私はドイツの都市の再開発について学びたいと思い、このFSに参加しました。事前学習では、テーマ別のグループになり学習をして知識を得たうえでドイツへと行きました。

このFSはもちろん自分の興味関心に対して学べるだけでなく、その他の多様なテーマについて、お話を伺ったり、町を歩いて体験してみたりして体験することができました。都市再開発については実際にお話を伺い、また街を歩いて日本との比較をしたり、自己学習では気づくことの出来なかった違いを目で見て理解することができました。ほかに印象に残っていることは、ドイツの有名なサッカークラブに行って、施設を見学したりスタジアムに入れたことです。普通の旅行ではなかなかできないことを出来るのがとても良いと思いました。

歴史や文化、自然などドイツの魅力はたくさんあり、このFSではそれを身をもって体験することができると思います。ドイツについて知りたい人はぜひ行ってほしいです。

# フィールドスタディ 中国 黄河流域

## —黄土高原の砂漠化防止と、歴史都市の文化、都市環境を学ぶ—

担当教員名 石神 隆／日原 傳

### 1 コースの概要

日 程	2014年8月28日～9月6日
場 所	中国 内蒙古自治区、西安市、北京市
参加人数	15名

### 2 コースの目的

地球環境問題のショールームともいわれる、中国黄河流域黄土高原の砂漠化、水資源問題、人口食糧問題、農村生活環境などを現地で身をもって体験し考える。

古都・西安（唐の都・長安）を訪問し、中国の歴史や文化を学習、また、現地の大学で大学生同士の交流をはかる。さらに、首都北京においては、都市の歴史や文化、都市の環境や経済などについて、自主的にテーマをもって行動し学習する。

以上の行程を通して、砂漠化地域の地球環境問題、中国の歴史・社会・文化、都市と地方の経済などを体験的に学習し、また、今こそ重要な、草の根の国際交流を図る。

### 3 事前学習

オリエンテーション、現地事情などの事前講義、準備ミーティングを、6月から8月出発直前まで数回実施。特に、砂漠化についての基礎知識、黄土高原の状況とその対応、訪問都市（西安、北京）の歴史文化と都市環境、等について重点的に学習した。また、現地での大学交流の準備も進めた。

### 4 行程

#### 1日目

午前、羽田発、北京空港で国内線に乗り換え、内蒙古自治区包頭空港着、専用バスでクブチ砂漠に深夜に到着

#### 2日目

終日 クブチ砂漠。恩格貝砂漠緑化プロジェクト基地を視察

砂漠科学館にて砂漠の科学、歴史、砂漠地域の文化、社会等について学習。夜は緑化基地のメンバーと懇談会

#### 3日目

専用バスにて、クブチ砂漠を広域に視察。七星湖砂

漠生態開発区に移動。砂漠植物生態展示、砂漠博物館にて世界の砂漠問題や開発利用について学習。

#### 4日目

七星湖砂漠開発区にてラクダに乗る。同地で開催の砂漠モーターバイク選手権なども見物。移動途中で黄河本流河畔に下りる。包頭市内散策。夜、包頭駅から夜行寝台列車に乗る。

#### 5日目

寝台列車は延安等の都市を經由し、午前に西安駅到着。

午後、西安市内の文化遺産、都市遺産（鼓楼、鐘楼、碑林、城壁など）を見学。中心部老街にて自由散策。

#### 6日目

終日西安市内。世界遺産兵馬俑を見学。日中交流の祖、安倍仲麻呂の碑を訪ねる。グループごとに市内自由散策。夜は翌日の大学交流活動のための準備、演目等のリハーサル。

#### 7日目

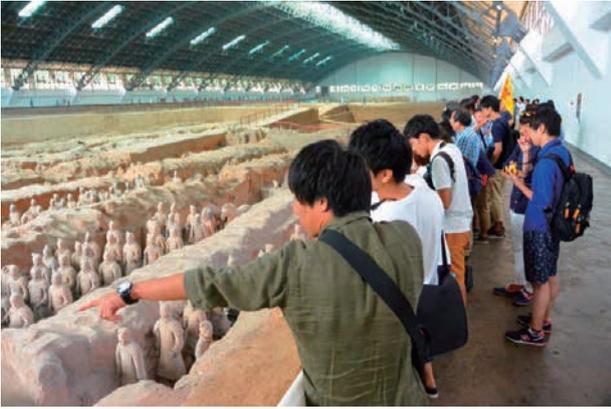
朝、西安外国語大学キャンパスに移動。同大学の副学長以下教員および約30名の学生が出迎える。昼過ぎ



砂漠緑化の学習、クブチ砂漠にて



ラクダを楽しむ、七星湖にて



世界遺産兵馬俑を見学



万里の長城にて



西安外国語大学にて同大学生とともに

まで、学内ツアー、グループでのテーマディスカッション、発表会、交歓会、食事をを行う。その後、移動し夕刻まで市内自由散策。

### 8日目

朝、西安空港から北京空港へ。着後、世界遺産万里の長城まで移動し自由行動。バス車窓より北京市内見学、景山公園に登り北京中心部および故宮全体を遠望。

### 9日目

終日、小グループごとに北京市内自由研修。夜は北

京ダックレストランにて現地報告会兼交歓宴会。

### 10日目

午前 北京空港発 午後 羽田空港着 解散

## 5 事後学習

各自の作成レポートをもとに、体験し考えたこと、学習したこと等を相互に報告しあった。また、砂漠問題の将来展望等について総括的な学習をした。文集作成予定。

## 6 雑感

「やはり現地に行かなければ中国の姿はわからない」、「中国の学生たちと交流し中国がとても身近になった」、「中国は地域も生活もかなり多様なところだ」等々、多くの事項を皆が肌身で強く感じ理解したフィールドスタディであった。各人の今後の生活設計や世界観構築の上で大きな糧となった。

## 学生の声

### 「中国 FS に参加して」



3年 小澤美伶

このFSで、砂漠での植林活動、歴史的都市景観について学びました。砂漠については事前講義で勉強していましたが、現地の方からお話を伺い、博物館を訪れることにより、机上では得られなかった知識を得ることができ、現地へ行くことの大切さを感じました。

兵馬俑坑や万里の長城の見学では長い中国史を感じ、また北京では経済成長を感じるなど、変わらない様子と進化し続ける様子を目の当たりにしました。

この多彩なプログラムを通して、私にとって大きな収穫となったものは、私が中国という国に対して偏見を持っていたということに気付かされたことです。中国人はマナーが悪い、道徳心にかけてといった見方をしていました。しかし現地で交流した中国人大学生や、ガイドさん、道を教えてくれた方々は私たち日本人に優しく接して下さいました。このような経験から、何も知らないまま偏見を持つことがどんなに愚かなことであるかを思い知らされました。

限られた情報から物事を判断せずに、広い視野を持って知識を得ることを今後の生活で大切にしたいと思いました。

# 開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る —内戦の遺産と現代カンボジア社会—

担当教員名 武貞 稔彦／岡松 暁子

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月24日～8月31日
場 所	カンボジア王国（プノンペン、シエムリアップ）
参加人数	25名

## 2 コースの目的

本コースの目的は、経済協力や援助の対象となっている開発途上国とよばれる国や地域の暮らしと人々について、五感を使って知ることです。今年度は典型的な途上国として想起されること多いカンボジアを訪問し、現地の現実とイメージの異同について考えます。とりわけ、内戦の遺産である多数の「地雷」が人々の生活を未だに脅かしている現状と、いわゆる「貧困」や「幸福」との関係について、異国人である日本人が理解／想像できる範囲という限界も意識しつつ考えることを目的とします。

## 3 事前学習

5月から8月にかけて6回（授業11回分）の事前学習を実施しました。貧困・格差・豊かさ、支援、歴史・内戦、世界遺産・自然、教育、地雷、という5つのグループに分かれ、それぞれカンボジアの歴史と現状や訪問先での学びに必要な情報を整理、共有するべく努めました。また日本とは環境が大きく異なる途上国に訪問するために、現地での滞在中に健康上注意すべきことなども確認しました。

## 4 行程

### 1日目

朝の飛行機で成田空港出発後、ホーチミン経由で夕刻にプノンペンに到着しました。

### 2日目

午前中は地雷除去を担当するカンボジア政府機関カンボジア地雷活動センター（CMAC）を訪問し、内戦の負の遺産である地雷についてのレクチャーを受け、実物の見学を行いました。午後は、プノンペン市内にあるツールスレン虐殺博物館を見学、その後、日本政府の支援で作られたカンボジア日本人材開発センター

をたずね、日本語を学ぶ現地の人たちと交流会を催しました。

### 3日目

午前中は国際協力機構（JICA）を通じて日本政府が支援し建設、運営されている浄水場を見学、午後にはJICAカンボジア事務所を訪問し、駐在する職員の方の講義を受けました。その後、NPO団体の日本地雷処理を支援する会（JMAS）から地雷除去活動に日本の民間団体が果たす役割や現地の人々の地雷に対する想いについてお話を伺いました。また夜には青年海外協力隊として現地で活動しておられる女性隊員の方たちから、現地での暮らしや支援について貴重なお話を伺いました。

### 4日目

プノンペン市内の王宮と寺院を視察後、キリングフィールドと呼ばれるポルポト時代の史跡を見学、内戦で犠牲となった人々に哀悼の意を捧げました。その後陸路約6時間をかけてシエムリアップに移動しました。

### 5日目

午前中はCMACが実際に地雷除去活動を行っている現場を視察、地雷の爆破処理に立ち会いました。午後は、日本人教員が活躍するトロンオンドーン小学校及びワットポー小学校を訪問し、先生や児童と交流を持ちました。

### 6日目

この日は終日アンコールの遺跡群をめぐり、歴史ある世界遺産を見学しました。夜は現地の伝統舞踊をみながら食事をとりました。

### 7日目

午前中は日本人女性が現地で起業したクルクメール工房というハーブ等を扱う工房を訪問、起業に至る経緯やカンボジアへの想いについてお話を伺いました。その後はトンレサップ湖で船上生活をする人々の集落を船で訪問しました。夕刻ホテルをチェックアウト、ハノイに向け空路出発しました。

### 8日

ハノイ経由成田空港に帰着し、朝、空港にて解散しました。

## 5 事後学習

事後学習は当初から予定されていた公開の事後報告会に向けた準備に主にあてられました。現地滞在中に

毎日書きためた気づいたことのカード（全部で1000枚を超えました）をシェアしつつ、事前学習で分かれたグループが現地視察を通じて知ったこと感じたことを報告としてまとめる作業を行いました。特に、「地雷」と「幸福」と「貧困」という三つのキーワードをどう結びつけられるのかということを中心にそれぞれ考察を深めました。学部生や外部の方も交えた事後報告会では、構成や発表などすべて学生自身が行い、あらためて現地視察を通じた学びの成果を確認するとともに、短い訪問期間では知り得なかったことなど、今後自らの学びに活かせる振り返りを行いました。

## 6 雑感

途上国への訪問では「学び」以外にも、集団行動をしながら健康を害さず事故なく帰ってくるという大事な目的があります。行程にも十分に配慮しましたが、参加学生がしっかり団結し協力してくれたおかげで、今回も無事に行程をこなすことができました。



カンボジア地雷除去現場に向けて歩く



カンボジア小学校交流会



カンボジア地雷除去現場でのレクチャー



カンボジア田園風景



カンボジア日本語学習者との交流会

## 学生の声

### 「カンボジアがくれた自分を見つめ直す機会」



2年 池田 葉留奈

私がカンボジアに行こうと思った理由は日本のかつての姿だと言われている途上国に行ってみたい、また本当にカンボジアとは貧しいのかを自分の目で見てみたかったからです。カンボジアは長い内戦の記憶が根強く残っているため、環境保全と社会開発を同時に行っていく難しさを強く感じました。また地雷除去が行われている地域にも訪れ、常に「死」と隣り合わせの生活を送っている人達がいる事に衝撃を受けました。今回カンボジアを訪れることで「私たちが行っているボランティア活動がカンボジアにとってどう機能しているのか」についても考える機会となり、援助依存が問題視されているカンボジアでは「援助」に対し何が1番必要であるかなどの見極めが大事であると思いました。当たり前だと思っていたことへの感謝の気持ちにも気付かされ、今生活している環境について深く考える機会ともなりました。新たな発見を求めにぜひ自分探しの旅へ出かけてみて下さい。

# オーストラリアン・フィールド・スタディ (AFS) : 英語と自然環境保護を学ぶ

担当教員名    ストックウェル    エスター／板橋    美也

## 1 コースの概要

日 程	2014年3月1日～16日
場 所	オーストラリア、クイーンズランド州
参加人数	24名

## 2 コースの目的

以下の三つの大きな研修目的に分けることができます。

- ① ボンド大学付属語学学校で英語を学ぶこと
- ② 世界的に珍しいオーストラリアの自然を学ぶこと
- ③ オーストラリアの文化を学ぶこと

## 3 事前学習

AFS の効果を高めるため、AFS の出発前に事前授業を6回行いました。内容としては、Tangalooma 島と Lamington 国立公園の自然環境と自然保護について、オーストラリアの文化について、異文化コミュニケーション方法について、そして、英語の基本表現力などについて学びました。

## 4 行程

### ① 語学研修

英語の授業は、クイーンズランド州ゴールドコースト市内のボンド大学キャンパス内にある大学付属語学学校 (Bond University English Language Institution (BUELI)) で行われました。BUELI 授業の開始初日に、Placement Test (英語力の判断をするためのテスト) が実施されました。このテストのスコアに基づき授業を受けるクラスレベルが指定されます。これは、「生徒の現在の能力にあうレベルで英語を学ぶことがその習得に役立つ」という考えからです。授業のプログラムは、学習の基礎となる項目である「聴く、話す、読む、書く」の能力向上を目指して総合的に進められました。

### ② オーストラリアの自然環境研修

・タンガルーマ、モートン島

タンガルーマ、モートン島は、世界で三番目に大きい砂の島です。モートン島には様々な自然環境があり、



モートン島で海洋生物学の専門家から話を聞く

素晴らしいビーチや砂丘を始め、湖、小川、岬等の地形、スゲ、ペーパーバッグスワンプ、バンクシア、マングローブなどの植物の育成地にもなっています。また様々な野鳥も生息しており、ジュゴン、イルカ、クジラ、海亀、エイなど多数の海洋生物が生息しています。モートン島の殆どの場所は国立公園に指定されており、厳しい取り決めにより自然を保護しています。参加する学生は1泊2日の日程で、特に元気な野生のイルカ達に直接餌を与える貴重な体験を含む、島にある様々な自然環境を体験し、その保護などを学びました。そして、島の自給自足についても学びました。

・レミントン国立公園

AFS では、 Gondwana 雨林保護区の一つのレミントン国立公園も訪問し、自然環境研修を行いました。レミントン国立公園には、亜熱帯、乾燥、温帯、寒帯の気候に属する植物が生息していて、太古の自然を思わせる景観が広がっています。亜熱帯地域のナンヨウスギ、寒帯地域にのみ見られるナンキョクブナ、また最古のシダ植物などの170種以上の希少な植物の他、クサビオヒメインコやアルバートココドリなどの絶滅危惧種を含む270種の鳥類、フクロギツネやパルマワラビー、ヒメウォンバットなどの珍しい動物を見ることが出来ます。本フィールドスタディでは、この貴重な自然をオーストラリアの政府がどのように保護しているか、どのように eco-tourism に結びつけているかなどを学びました。

③ 2週間の本フィールドスタディ中は、各学生が、日本人学生の受け入れ経験のあるオーストラリア人の家庭で過ごしました。オーストラリア人の実際の生活を通じて、オーストラリアの文化を学ぶことも貴重な経験となりました。

## 5 事後学習

AFSに参加した学生には2つの課題が出されました。一つはフィールドスタディ全体についてのポートフォリオを作成することです。もう一つはオーストラリアの自然環境研修についてのグループ・プレゼンテーションで、この課題の発表会がありました。



ホストファミリーたちと



レミントン国立公園の森を歩く



ボンド大学キャンパス



英語コースを終え、修了証書を手元に記念撮影

## 学生の声

### 「今でも忘れられないオーストラリアでの2週間」



2年 岡部 祐季

オーストラリアフィールドスタディー（AFS）では、2週間ホームステイをしながらオーストラリアで過ごします。日本語の通じない国でバスに乗ったり、買い物をしたり、普段何気なく過ごしていた日常がオーストラリアという環境に変わるだけでかなり違ったものになります。英語が分からないため、最初の1週間はホームシックになってしまいましたが、2週目に入ると徐々に英語にも馴染めてきてとても有意義に過ごすことができました。

参加してみて思ったことは、英語の得意不得意は関係ありません。言葉以外にもコミュニケーション方法はたくさんあります。

日本では体験できないことがオーストラリアにはたくさんあります。野生のコアラを見たこと、語学学校に通って異文化交流をしたことなど、どれも今思い出しても楽しく意味のある体験でした。AFSに参加しない理由はありません。是非、一足早い夏をオーストラリアで体験してきてください。かけがえのない思い出になること間違いありません。

# これまで実施した海外フィールドスタディ

## スリランカ「開発途上国の人々の暮らしと国際協力の現場を五感で知る―震災／津波被災地をつなぐ―」

実施年度	2012年度Ⅰ期	場 所	スリランカ：コロンボ、ゴール、キャンディ
------	----------	-----	----------------------

### 【目的】

経済協力や援助の対象となっている開発途上国とよばれる国や地域の暮らしや人々について、五感を使って知ることです。特に2004年のインド洋津波の被災地の今を見て、日本の被災地のことを考えることを通じて、通常とは異なる角度から日本との関係や日本社会自身のことを見つめなおす機会とします。スリランカ現地大学の学生と交流授業を行いました。



「インド洋大津波で被災した漁港で JICA 職員の説明を聞く」

## 南インド「開発途上国における生物多様性の保存の現場にふれる」

実施年度	2012年度Ⅰ期	場 所	インド：バンガロール、マイソール
------	----------	-----	------------------

### 【目的】

世界的な生物多様性の重要地域（ホットスポット）のひとつである南インド西部の「自然」と野生動物にふれ、

①生き物の観察を通して、ホットスポットの自然環境を理解する力を養うこと

②観光や森林利用といった開発途上国における人間と自然保護の関係について考えること

③インドゾウを取り巻く環境と文化についての理解を深めること

を目的としました。



「ランガンチットゥ鳥類保護地区で水鳥やワニを観察」

## オランダ・ドイツ「国際平和の追求―国際法の現場を知る―」

実施年度	2012年度Ⅱ期 2010年度Ⅱ期	場 所	オランダ：アムステルダム、ハーグ ドイツ：ハンブルグ
------	----------------------	-----	-------------------------------

### 【目的】

国際法が実際に使われている現場（国際裁判所、化学兵器禁止機関）を訪れ、国際社会の秩序がどのように維持されているのかを体感する。また、国際法により保護されているリュウベック旧市街地（世界遺産）を訪れ、見識を深める。さらに、アンネ・フランクの隠れ家やノイエンガム強制収容所を見学し、ナチスによるユダヤ人迫害について学ぶ。その他、外国の歴史や文化に触れ、日本を振り返りつつ、国際感覚を身に着ける。



「国際海洋法裁判所にて柳井裁判官の講演を聞く」

# 国立公園の魅力を支える地域活動にふれる

担当教員名 高田 雅之

## 1 コースの概要

日 程	2014年9月5日～9日
場 所	北海道 利尻礼文サロベツ国立公園
参加人数	29人

## 2 コースの目的

利尻礼文サロベツ国立公園の優れた自然にふれながら、NPO などによる保全活動や、産業振興との共生に取り組む人々の活動現場を訪ね、対話をとおして自然の魅力を支える地域社会の在り方について考えることを目的とします。サロベツ湿原では自然再生や農業との共生について、利尻島では外来種問題や観光との関わりなどについて学びます。

## 3 事前学習

以下のテーマ別に5つのグループに分かれ、現状と課題を調べ、発表し合うことで問題意識の共有を行いました。

- 1) サロベツ湿原の自然と再生
- 2) サロベツの農業と観光
- 3) 利尻島の自然と観光利用
- 4) 自然を守る地域活動（NPO など）
- 5) 国立公園の管理と課題

## 4 行程

### 1日目

午後に稚内市に集合しサロベツ湿原へ。湿原センターで環境省自然保護管から国立公園の概要について、NPO サロベツエコネットワークの方からサロベツの自然とNPO活動について学んだ後、木道を歩いて直に湿原に触れました。夕暮れを海岸で過ごし、夜は星空観察を兼ねて森を散歩しました。

### 2日目

午前には海岸砂丘林を探検しクマゲラやヒグマの痕跡を観察したのち、砂丘林再生用のミズナラ苗畑で草むしり作業を行いました。次に山本牧場を訪ね酪農の現場と湿原との共生の取り組みについて学習し、午後は湿原の自然再生の現場を訪ね、地域で活動されている方のお話を聞きました。

### 3日目

ノシャップ岬からサハリンを眺めたのちフェリーで利尻島へ。ウニ採り体験と利尻昆布お土産づくり体験に分かれて海の恵みを実感したのち、岬公園や街中の「島の駅」などを散策しました。夜の「利尻塾」では利尻島自然情報センターと地域おこし協力隊の方のお話を聞き、意見交換をしました。

### 4日目

種富湿原にて外来種オオハンゴンソウ除去作業で汗を流した後、登山道の浸食問題について現場で学習しました。南浜湿原では木道を一周して自然観察を行い、利尻町立博物館では自然を守る上で博物館の果たす役割について学びました。また姫沼、オタドリ沼、麗峰湧水など利尻島の豊かな自然資源を訪ねました。連夜の「利尻塾」では自然ガイドと登山道補修に取り組む方のお話を聞き意見交換をしました。

### 5日目

利尻島に別れを告げ、稚内のメガソーラー、宗谷岬、ウインドファーム（風車）を見学し稚内空港で解散しました。

## 5 事後学習

事前学習で掲げた5つのテーマについて、現地で実際の自然に触れ、地域で活動する人々から直接話を聞き、意見交換した結果をもとに、各グループの学習成果をまとめ、発表を行いました。また、各参加者がこの旅で発見したこと、感じたこと、今後の大学での学習に行かせることなどについてレポートにまとめ、提出してもらいました。



利尻島の海の恵み、ウニ取り体験



外来種オオハンゴンソウ除去の格闘

# すぐれた自然の利用と保護のバランスを考える

担当教員名 高田 雅之

## 1 コースの概要

日 程	2014年9月10日～14日
場 所	北海道 大雪山国立公園、コムケ湖など
参加人数	23人

## 2 コースの目的

大雪山国立公園の優れた自然にふれるとともに、登山や観光に伴う植生破壊や登山道浸食の現場を訪ねます。またヒグマとの軋轢と共生方法、山岳エコツアーのあり方について学習します。オホーツク海に面した紋別市のコムケ湖では地域資源を見つめ直してラムサール条約登録を目指す地域の取り組みを学びます。これらを通してすぐれた自然の利用と保護のバランスについて考えます。

## 3 事前学習

以下のテーマ別に4つのグループに分かれ、現状と課題を調べ、発表し合うことで問題意識の共有を行いました。

- 1) 大雪山における登山道浸食と湿原踏みつけ問題
- 2) 大雪山におけるヒグマと人の軋轢と共生
- 3) 大雪山・コムケ湖の魅力とエコツアーの可能性
- 4) コムケ湖の魅力と保護に向けた地域の取り組み

## 4 行程

### 1日目

羽田空港に集合し旭川へ、バスで大雪山国立公園での滞在地層雲峡に到着し、雄大な滝を散策しました。夜は環境省自然保護管と湿原の植生復元を行う専門家から、国立公園の概要と課題、植生復元の方法と効果について学びました。

### 2日目

植生復元と登山道補修のための資材を皆で分担して担ぎ、愛山溪温泉から沼ノ平湿原に向けて登山を行いました。天候に恵まれず、2/3登ったところで断念。資材はそこまでしっかり運びました。午後は天候が回復し、雲井ヶ原湿原を散策し、美しい紅葉に包まれた大雪山を堪能しました。夜は昨夜に引き続き環境

省と民間の方を講師に山岳エコツアーのあり方について学習しました。

### 3日目

高原温泉のヒグマ情報センターでヒグマと登山者との共存に向けた取り組みについて学んだのち、数年ぶりの美しさという紅葉の高原沼を廻りました。午後はオホーツクの町紋別市へ。夜はコムケの会の方から、コムケ湖のラムサール条約登録に向けた地域の取り組みと課題について学びました。

### 4日目

流氷科学センターと海中を眺めるオホーツクタワーでオホーツク海の自然について学んだ後、トッカリセンターでアザラシ達と触れ合いました。かつて漁業で使われた番屋で昼食の後、コムケ湖の湿原・塩湿地や海浜植生など日本屈指の渡り鳥飛来地の豊かな自然に触れました。夜はコムケの会の方々とコムケの自然をテーマに意見交換会を行いました。

### 5日目

自転車でサロマ湖ワッカ原生花園の雄大さを体感し、能取湖のサンゴ草の紅葉を見るなど網走国定公園の優れた自然に触れ、女満別空港から羽田空港へと帰途に着きました。

## 5 事後学習

事前学習で掲げた4つのテーマについて、現地で実際の自然に触れ、地域で活動する人々から直接話を聞き、意見交換した結果をもとに、各グループの学習成果をまとめ、発表を行いました。また、各参加者がこの旅で発見したこと、感じたこと、今後の大学での学習に行かせることなどについてレポートにまとめ、提出してもらいました。



ヒグマ情報センターでヒグマ剥製を前にして



アザラシと触れ合う(紋別トッカリセンター)

# 津軽半島をむすぶまちづくり

担当教員名 西城戸 誠

## 1 コースの概要

日 程	2014年2月20日～23日
場 所	青森県五所川原市、中泊町、十和田市
参加人数	21名

## 2 コースの目的

赤字路線のローカル鉄道の中でも人気の津軽鉄道とそれをサポートする沿線の地域活動を見学しながら、奥津軽地方の「着地型観光」について考えていきます。着地型観光とは、従来型の発地型観光とは異なり、着地側が受け入れやすい観光を通じて観光地の人々と観光客の間によりコミュニケーションが生まれるような地域密着の観光のことです。また、企業組合・でるそーれの皆さんが運営しているコミュニティカフェと、十和田市のコミュニティカフェ・ハピたのを訪問し、着地型観光、コミュニティカフェの実践から、地域の持続可能性とは何かという問いを見出すことが目的です。

## 3 事前学習

事前学習は2回（1回は3時間）実施し、『観光と環境の社会学』『コミュニティデザインの時代』『コミュニティビジネスのすべて』『コミュニティ・カフェと市民育ち』などを講読しました。

## 4 行程

### 1日目

五所川原市に到着後、駅周辺の街歩きをしました。「立佞武多の館」で五所川原の夏の風物詩・立佞武多を見学した後、つがる市フィルムコミッションの川嶋大史さんに「映画と地域づくり」という講演をしていただきました。夕食は、コミュニティ・カフェ・でるそーれの「うちごはん」をいただきました。

### 2日目

津軽鉄道の冬の風物詩であるストーブ列車に乗車し、金木駅で下車、太宰治記念館（斜陽館）と新座敷を訪問し、太宰治に関わる観光資源を見学、その比較検討を行いました。午後は、かなぎ元気村で「旧正月劇場型体験プログラム」という観光コンテンツを体験しました。さまざまなタイプの観光資源に接し、何度も訪れたい観光コンテンツがどのようなものなのかという点を考えるきっかけになりました。夜は中泊町に

移動し、地元でグリーンツリーズムや伝統料理教室を行っている「かけはしの会」による夕食（奥津軽のばけまんま）をいただきました。

### 3日目

午前中は、冬のアスパラ収穫体験を行いました。このアスパラは、津軽鉄道の「応援」のためにも売られています。また、アスパラの栽培の加温のために、薪の暖房と学校給食の廃油を用いており、環境教育の場にもなっています。午後は、でる・そーれの辻悦子さんから「人と地域をつなぐコミュニティカフェ」という講演をしていただき、奥津軽のラジオCMをつくるワークショップを行い、夜は奥津軽の観光について地元の方の前で発表し、講評をいただきました。

### 4日目

最終日は、奥津軽から南部へ移動し南部裂織体験を行った後、十和田市のコミュニティカフェ・ハピたの中沢さんから「子どもとコミュニティカフェ」というお話を伺いました。また、十和田現代美術館も訪問し、アートと地域づくりの話も伺いました。

## 5 事後学習

事後学習は、写真を見ながら奥津軽の着地型観光やコミュニティカフェと地域づくりについての議論や、フィールドスタディのコンセプトについての議論をしました。「机の上だけじゃ学ぶことのできない ここできなければ巡りあうことができない そんな時間と出会いが“ここには”ある」という奥津軽の方のメッセージを共有する時間になりました。



五所川原市内の街歩き



アスパラ収穫体験

# 青森県におけるりんご産業から 地域特性を活かしたビジネスモデルを学ぶ

担当教員名 金藤 正直

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月25日～28日
場 所	青森県青森市、黒石市、弘前市、板柳町
参加人数	16名

## 2 コースの目的

りんご生産量が日本一である青森県には、りんごの生産、加工、流通、販売、研究機関等の組織が数多く存在しています。これらの組織は、個別に活動しているだけではなく、組織間で連携しながら、製品・商品の開発や販路開拓・拡大といった「事業（ビジネス）」を行っています。このコースでは、①青森県におけるりんご産業の歴史、②りんご産業を支える上記組織の役割、③組織間での連携事業の特長、④りんご産業の問題とそれに対する解決策、という4つの学習を通じて、地域特性を活かした「事業（ビジネス）」の現状と課題を明らかにし、また、そこから新たなビジネスモデルを提示していくことを目的としました。

## 3 事前学習

事前学習では、青森県農林水産部りんご果樹課が刊行している冊子『平成25年度版 青森りんご』と、同課が作成したDVD『青森りんご物語ーりんごのキモチー』を用いて、県内のりんご産業の現状、産業を支える組織の紹介、年間のりんご栽培の方法等について学習しました。その後、調査チームを6つ（2人/チーム）作り、各チームで、上述の学習目的①から④に関連した県庁作成の報告書や経営学の著書等を利用しながら、自主学習を実施していきました。

## 4 行程

1日目：現地（青森駅）集合⇒青森県農林水産部りんご果樹課⇒青森県産業技術センターりんご研究所

1日目は、青森駅に集合し、そこから最初の訪問先である青森県農林水産部りんご果樹課に行きました。ここでは、配布資料を使用しながら、同課職員の方による現在実施中あるいは将来実施予定である県内のりんご産業の支援策（政策やそれに基づく事業）に関する講義を受講しました。

りんご果樹課での講義後、次の訪問先である青森県産業技術センターりんご研究所に移動しました。ここでは、最初に、所内のりんご史料館の中に展示されているパネル・模型と映像等を利用しながら、研究所の概要、県内のりんご産業の歴史、りんごの品種、機能、栽培方法等に関する講義を受講しました。次に、所内の栽培部の農園を見学し、講義で説明されたりんごの品種、栽培方法、病害虫による被害果等を直接目で見て学習しました。

2日目：弘果弘前中央青果（株）⇒弘前市りんご公園

2日目は、午前中に、青森りんごの流通拠点である弘果弘前中央青果（株）に行きました。ここでは、まず、場内を見学し、青森県を代表する総合卸売市場としての雰囲気、りんごの競売とその後のりんごの取り扱い方、りんごの選果・選別システムや保管庫（冷蔵庫）等を見学しました。場内の見学後は、会議室において、会社の概要および市内あるいは県内の役割やその取組み等に関する講義を受講しました。

弘果弘前中央青果（株）での見学・講義後、次の訪問先である弘前市りんご公園に移動し、到着後、園内を見学しました。見学では、市職員の方に、園内の概要だけではなく、りんごの品種、作業、保管庫（冷蔵庫）、シードル工場等を説明してもらいました。午後からは、園内にあるりんごの家で、野呂先生（りんご公園専任指導員）による青森りんごの生産や産業の課題等に関する講義を受講しました。講義後、農園でのりんごもぎとり収穫体験やシードル工場でのシードルの試飲を行い、りんごのもぎ方、もぎ取るりんごの選び方、シードルの味、色、ビン・ラベルのデザイン等を学習しました。



講義の様子



農園の見学



りんごの競売



りんごもぎとり体験



草木染の様子



クッキー作りの様子

### 3日目：板柳町ふるさとセンター（りんごワーク研究所）

3日目は、町レベルでりんごを活用した地域振興事業を展開している板柳町を訪問しました。午前中は、りんごワーク研究所の葛西所長によるふるさとセンターの概要やりんごワーク研究所の立ち上げから現在に至るエピソードを含めた町の取組みに関する講義を受講しました。講義後、同センター内の施設（ジュース等の加工場やりんごの貯蔵施設等）や町のりんごに関する展示品等を見学しました。午後からは、同センター内にある工芸館で創作体験（草木染、クッキー作り、陶芸、林寿）を4グループに分かれて行いました。

### 4日目：調査報告会（弘前大学人文学部）⇒現地（弘前駅）解散

4日目は、各チームが、事前学習、自主学習、そして、3日目までの訪問先での講義、見学、体験に基づいて調査結果を報告するフィールドスタディ調査報告会を弘前大学で開催しました。ここでは、各チームがこれまでの取組みから明らかにしたりんご産業の問題点を、経済政策、流通・物流、マーケティング、商品開発、教育（人材育成）等のさまざまな視点から解決していく方法を報告し、また、その方法から考えられるりんご産業の新たなビジネスモデルについても提案しました。調査報告会は夕方まで行われ、その後、弘前市内で解散しました。



報告会終了後の集合写真

## 5 事後学習

事後学習では、各チームで4日目に開催した調査報告会での報告資料やその内容を再度整理するとともに、整理した内容をレポートにまとめ、提出してもらいました。なお、提出された報告資料やレポートは、各訪問先にも送り、その内容を評価してもらいました。

## 6 雑感

今年度のフィールドスタディでは、各訪問先での講義、見学、体験学習を通じて、りんご産業を支援する自治体（青森県、弘前市、板柳町）やその関連組織（弘前市りんご公園やりんごワーク研究所）、りんご農家のための研究機関（青森県産業技術センターりんご研究所）、りんごの流通市場（弘果弘前中央青果（株））、といった組織としての役割や重要性を学習でき、また、こうした学習に基づいて、りんごを活用しながら新たな地域振興事業を展開していく方法論も提案できたことから、「1. コースの目的」に示された目的を十分に達成することができました。

## 学生の声

### まさに「五感で感じる学び」を体験

私がこのフィールドスタディ（FS）に参加するにあたって、一番知りたかったことは「普段身近にあるモノの流通の仕組み」でした。そのため、「青森県のりんご産業」という非常にポピュラーな作物を取り扱っている産業や地域特性を活かしたビジネスモデルに興味を持ちました。

このFSでは、りんご産業に関わる組織を5か所訪ねました。青森県庁りんご果樹課、青森県産業技術センターりんご研究所、板柳町ふるさとセンターでは、講義や見学を通じて、りんごの多様性や進化の歴史、県内や町内でりんごがどのような意味を持つ作物であるのかを知ることができました。また、弘果弘前中央青果（株）では、直に「りんごの競り」が見学できました。さらに、私がこのFSで印象深かったのは、弘前市りんご公園でのりんごもぎ取り体験です。

このように、私たちは、自らの五感を使った、「りんご」をテーマとしたFSを通じて、県内のさまざまな組織がお互いに役割を担うことにより、私たちの食卓にりんごが並び、という「りんごの流通の仕組み」や「りんご産業のビジネスモデル」を学ぶことができたと思います。また、多くの人々に出会い、いろいろなお話を伺う機会を得ることができました。

現地では、多くの方が、それぞれの想いと信念を持ってりんご産業に関わっているのので、思っていた以上に多くの情報が得られ、濃密な時間を過ごすことができました。このFSで経験した「知りたいことは自ら進み体験し会得すること」、「問題を自ら提起し考察し結論を出すこと」をこれからの学生生活で活かしていこうと思います。



2年 庵崎 恒平

# 被災地のレジリエンス形成に向けての支援活動

担当教員名 辻 英史／武貞 稔彦

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月6－10日（前半）・ 18－22日（後半）
場 所	宮城県石巻市北上町（仮設団地につこりサンパーク）
参加人数	前半4名、後半5名

## 2 コースの目的

農業支援を中心とした仮設住宅団地の復興支援

東日本大震災の被災地では仮設住宅での暮らしが3年目を迎えている。本FSではNPO法人パルシックを受入れ団体とし、石巻市北上町の仮設団地につこりサンパークを中心にボランティアとして作業をおこない、現地住民の方たちと交流しつつ震災復興の現状と被災地域のレジリエンス（回復力）の形成について学んだ。

## 3 事前学習

1. 外部講師として震災前から石巻市北上町をフィールドとして調査されている長崎大学の黒田暁先生をお招きし、北上町の地域の特徴、震災の被害状況、復興の状況とその問題点についてレクチャーを受けた。（6/28）
2. 現地で受け入れの責任者であるパルシックの西村陽子さんをお招きし、支援活動の内容について詳細な説明をいただいた。（7/23）

## 4 行程

被災地の復興は、①すまいの復興、②暮らしの復興、③地域社会の復興、という3つの問題群に大きく分けられる。このFSでも、これらの領域に接する活動をおこなった。①は住宅地の高台移転に向けた作業が中心になっており、これに直接関わることは少なかったが、大型トラックが行き交い、緑の山を削って住宅地造成が進む光景を目の当たりにし、また工事の遅れの話

耳にすることで、住民の合意形成の難しさを肌で感じることができた。②③に関しては、以下のように実際に支援活動に参加することができた。

### 1. 生業支援

地元の農業や漁業を再興することは復興活動支援の重要な一角である。

農業では、最近北上の地域住民が自ら育てた農作物を販売したり、加工して商品化しようとする動きが出てきている。参加者は仮設住宅に住む人々とともに農園の草むしりをおこない、またそこで採れた野菜農作物を販売する手伝いをおこなった。

漁業では、従来の個人経営とは異なり、数人の漁師が共同で事業をおこなう協業化がすすめられている。十三浜地区のワカメ農家や、協業による漁業を営む「鵜の助」を訪問し、漁具の手入れや清掃のほか、漁船に同乗させていただきホヤやホタテの収穫を体験した。

### 2. 学習支援

震災で環境が激変し、大きなストレスを受けている子どもたちへのケアは、子どもたちにとっても、その保護者の方々にとっても大きな意味がある。NPO法人日本冒険遊び場づくり協会とともに、北上小学校の裏山につくられたプレイパークで子どもたちと思いっきり遊んだ。また、ボランティア・グループ「レスキュー・キャット」とともに小中学生の夏休みの宿題の手伝いや、映画上映会、お祭りの手伝いなどの活動をおこなった。

### 3. 仮設住宅団地内でのふれあい・コミュニティ活性化

参加者は、十三浜地区の祭の食事の準備や販売、駐車場の交通整理などの作業に汗をかいた。また、につこりサンパーク内で活動するお母さんたちの小物づくりを手伝うこともあった。こうした作業の合間に、震災についての体験談を聞く機会もあり、そこでも学生たちは大きな刺激を受けた。

## 5 事後学習

1. 最終日に現地で教員とともにふりかえりをおこない、FSにおける印象や感想を整理し、反省点をまとめた。
2. 事後学習会では、被災地の現状と支援活動の状況について、またボランティアのあるべき姿について議論を深めた。(9/11)
3. 第39回法政大学大学院まちづくり都市政策セミナーのポスター・セッションにおいてパネル報告をおこなった(11/25)。
4. 学生たちが提出した最終レポートは、人間環境学部ホームページにて公開している。  
(<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/shinsai/index.html>)

## 6 雑感

このフィールド・スタディーは2011年以来毎年実施しているが、3年目を迎えて被災地の状況は相当に

変わりつつある。復興の進むなかでさまざまな問題を抱えている現状を目の当たりにすることが、学生たちにとって最初の大きな学びであった。

FSでおこなうボランティアの支援のあり方も次第に変化してきた。初年度のようなガレキの片付け、支援物資の仕分けといった仕事から、被災地の人々が新たな生業を作り出していくことに協力する、あるいは子どもたちを通じて地域社会の活性化に関与するといった活動が重要になってきている。

そのなかで、私たち外部の人間は被災地の方々にとどのように関わっていくべきなのだろうか。支援のあり方、またボランティア活動の意味をめぐって、学生たちは悩みながら活動を続けた。その答えは簡単には出ないものである。しかし、こうした支援活動の難しさ、被災地に関わり続けることの大事さの両方を、参加学生には十分理解してもらえたと思う。

最後に、例年学生を受け入れていただいているNPO法人パルシックに、この場を借りて御礼申し上げます。



「鵜の助」漁具の手入れを体験



農園で草むしりを体験



相川祭の手伝いを体験



ワカメ農家にて

## 学生の声

### 「一時的なボランティアの役割とは？」



2年 岩崎 咲穂

私は宮城県石巻市北上町の震災からの復興について考えるFSに参加しました。FSに行く前に事前学習の時間が何回か設けられていて現状を理解するのと何を学習しに行くかが明確になりました。また、事後学習では得た感情を発表する機会があるなど学習サポートがとても充実していました。

現地では農業、漁業、子ども支援といった様々なボランティア活動を通して参加者全員がたった数日間のボランティアで現地の方々役に立っているのだろうかという一時的なボランティアとは何だろうという感情を抱きました。しかし、このFSで得た感情を持って帰りこれから自分たちがどう行動していくのか、どう復興の状況を発信していくのかがこれから大切なことなのでありこのFSの意義であったと考えます。

FSは自分の頭の中で考えていたことをとことん覆しました。ぜひ興味のある分野のFSに参加してこの感覚を味わってください。また、FS後の学習を大切にしてください。

# ブナの森から農業と農村を考える（吉川FS）

担当教員名 田中 勉

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月17日～20日
場 所	新潟県上越市吉川区
参加人数	22人

## 2 コースの目的

このFSの目的は、農業と農村についてよく見て考えることです。日本の農業は衰退が指摘されて久しく、農村は過疎と高齢化そして後継者難に苦しんでいると言われています。それは本当だろうか？実際に自分の目で確かめてみよう。徹底的に見る・聞くことをめざします。

## 3 事前学習

現地では何を見るか、何を尋ねるかを明確にするための準備として①日本農業の現状、②吉川区の概要、③食料・農業・農村基本法、④中山間地域等直接支払制度、⑤農業法人による集落営農、などについて文献・資料を用いて学びました。また、グループワークで「質問したいこと・知りたいこと」の一覧表を作り、事前に現地関係者に送りました。

## 4 行程

### 1日目

昼食前に現地集合、「開講式・オリエンテーション」からスタート。この日は行政からのレクチャーがメイン。吉川区と農業の現況について区職員からの説明と市の農林水産部課長による「上越市の農業政策」に関する講義を受けました。雨模様だったためその後のブナ林散策は翌日に延期しました。

### 2日目

この日は快晴。マイクロバスで区内を山から日本海まで移動する「水の流れをたどる旅」でした。地元の人々に親しみをこめて「尾神さん」と呼ばれる尾神岳のブナの森を抜けて吉川の流れに沿って下り、途中、田んぼへ水を引くための「堰」や「用水路」を見学、水利用と集落形成の関係について学びました。

午後は、「溜池」と、その水を利用するための施設である「ファームポンド」や「揚水機場」を見学、参加者の要望に応じて日本海の浜辺まで足を伸ばし青空と雄大な海を満喫しました、佐渡島を遠望できました。

帰途、ブナの森の湧水に立ち寄り、冷たくおいしい水でのどを潤した後、延期していた「田んぼの学校」へ行き、ブナ林でひとときを過ごしました。

夕食は地元関係者との交流会。お世話になる方々とバーベキューをしながら多くのことをお聞きする機会となりました。

### 3日目

この日のテーマは「集落営農と棚田」。まず、平地の大規模圃場で集落営農を行っている「竹直生産組合」を訪問、集落単位で農業を行う背景・現状・課題などについて説明を受けました。その後、米の貯蔵施設「カントリーエレベーター」を見学。

午後、区内産の材料で作られたおいしいジェラートを食べたり、お土産を買ったりできる施設「杜氏の郷」を訪問、楽しかった。

次に、小規模な集落営農組織「東田中生産組合」を訪ね、コメ販売の工夫などについてうかがい、農機具の見学も行いました。

その後、区内で最奥の山間、川谷地区へ移動。旧川谷小学校で3グループに分かれて農家の方を囲んで棚田の農業について話しをうかがいましたが、大幅に予定時間をオーバーするほど熱の入ったものとなりました。近くの畑でダイコンの種まき体験を楽しんだ後、夕暮れの棚田を見学。シカやイノシシの獣害が深刻になってきている現状についても、美しい自然を眺めながら説明を受けました。

### 4日目

山間地集落の現状と課題について、集落づくり推進員からの講義を受けた後、FSを通して疑問に思ったこと、尋ねてみたいことに関して「まとめの質問会」で理解を深め、昼食後に帰途につきました。

## 5 事後学習

秋学期開始時に事後学習会を開き、参加者各自が吉川で考えたことを発表し合い、まとめの学習を行いました。また、各自の課題に関するレポートを提出しました。



尾神岳（670m）から吉川を眺望する

# 障害者福祉の体験

担当教員名 朝比奈 茂／宮川 路子

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月7日～22日
場 所	群馬県安中市 「ゆきわりそう」の山荘内にて
参加人数	10人

## 2 コースの目的

障害者と合宿を通じて寝食および行動をともにすることで、人間としての生き方を実感する。また福祉活動における仕事内容、それに携わっている方々と意見交換をすることで、現在の福祉環境について理解を深める。

## 3 事前学習

NPO 法人「ゆきわりそう」より担当者を大学に招いて、組織の基軸となっている「ゆきわりそう」の活動内容や障害者の身体的および精神的特徴について、口頭および DVD により説明をうけ、理解を深めた。また開講するプログラムの説明をうけ、各自の興味や関心に沿って参加プログラムを決定した。後日、「ゆきわりそう」のプログラム責任者と連絡をとり、各自練馬区にあるゆきわりそうの本部施設に出向き、事前打ち合わせを行い、出された課題を各自で学習し、当日に備えた。

## 4 行程

8月7～9日

・ソフトクリーム

対象者：知的障害者

8月9～11日

・マラソン1

対象者：知的障害者

8月10～12日

・ハーフマラソン

対象者：重度知的障害者

8月12～15日

・マラソン2

対象者：知的障害者

8月20～22日

・クレヨン

対象者：知的障害者

## 5 事後学習

事前学習同様に「ゆきわりそう」から担当者をお招きして事後学習会を開催した。当日は、課題である「実施報告書」および「フィールドノート：日誌」を持参し、各々が行った活動を共有した（情報の共有化）。ディスカッションの内容、および方法は、学生を2つのグループに分け、リーダーを中心に以下の項目に沿って行った。

1. 実習前の障害者に対するイメージなどについて
2. 実習直後に感じたことについて
3. 実習を終えて数か月経った今、感じることに

グループ内で共有化をはかった後に、「FS を通じて学んだこと、考えたこと、これから行うこと」をテーマに、グループごと発表を行った。最後に担当教員およびゆきわりそうの担当者より講評を述べ事後学習会を終了した。

## 6 雑感

本フィールドスタディは、学部創設以来、現在まで行われてきたロングラン・プログラムであり、人間について考えることの出来るプログラムの一つである。

人間の成長段階における最終章となる大学生。この時期に、同じ人間であるのにあまりにも違う生き方をしている障害者の方々の生き方を、寝食をともにする合宿形式で過ごすことで、人間について深く考えることが出来るプログラムであると感じている。普段我々は、自分の意志によって行動を決定し、日常自由に生活することが出来る。当たり前のようにあるが、そうでない人もいる。参加した学生たちは多くのことを感じ学び得た FS であったと感じている。



障害者福祉体験を行いました

# 歴史的環境の保全を考える

担当教員名 根崎 光男

## 1 コースの概要

日 程	2014年6月29日、9月4日～6日
場 所	埼玉県川越市、神奈川県小田原市・箱根町
参加人数	21名

## 2 コースの目的

先人の営みが刻まれた史跡や遺物、伝統的建造物群、景観などは、有限の歴史資源であるが、現代社会の利便性や効率性の追求、そして人々の生活態様の変化によって、その保全が危機に瀕している。そこで、各地域の歴史的環境保全への取り組みを実際に見学し、その現状と課題を学習する。

今回は、小江戸と呼ばれて蔵造りの町並み（伝統的建造物群）や本丸御殿が残る埼玉県川越市と、江戸時代に新田開発されてその景観を残している見沼田んぼを擁する埼玉県さいたま市、そして小田原城などの国指定史跡がある旧城下町としての神奈川県小田原市、さらに旧東海道の石畳や杉並木、復元された関所などが残る旧宿場・温泉町としての神奈川県箱根町を訪ね、各自治体の歴史的環境保全の取り組みを考える。

## 3 事前学習

事前学習は、6月7日（土）4時限目、6月21日（土）4時限目の2回実施した。

1回目は、当フィールドスタディの目的や巡回コースの説明を行い、厳守事項について確認した。また、



川越のシンボル「時の鐘」前で

2回目の事前学習で歴史的環境の保全について意見交換するための前提となる、各自治体の歴史的環境保全の取り組みをレポートにまとめてもらうための説明を行った。

2回目は、参加者から各自治体の歴史的環境保全の取り組みを発表してもらい、地域がかかえる課題や問題点を共有し、その解決のためにどのような方策が必要かなどの議論を行った。参加者が住む自治体の文化財保護の現状と課題についての発表が中心であったが、京都や近江八幡などの歴史的環境保全の先進地域の取り組みについての報告もあった。

## 4 行程

### 1日目

日帰りコースは、午前中に東武東上線川越市駅に集合、貸切バスで移動して蔵造りの町並みと川越のシンボルである「時の鐘」を散策したあと、川越城本丸御殿を見学した。午後、貸切バスでさいたま市に移動、江戸時代に開発された見沼田んぼの通船堀周辺を散策し、浦和くらしの博物館では職員の方からこの地域の先人の暮らしについての説明を受け、そのあと雷雨に見舞われたため、江戸時代の名残りをとどめる浦和西高校斜面林を車中から見学した。

### 2日目

ここからが神奈川県を中心に、静岡県の一部を含む2泊3日のコースである。1日目はJR小田原駅集合、徒歩で国史跡・小田原城を訪ね、現在進められている城址の発掘作業を見学したのち、城内の資料館を観覧、その後報徳二宮神社や城址公園などを散策した。発掘作業の地道な作業が、歴史的環境保全に欠かせないことを確認。このあと、箱根登山鉄道で小田原駅から箱根湯本駅に向かい、宿泊先に到着した。

### 3日目

午前中に箱根町立郷土資料館に行き、館長の鈴木康弘氏より「箱根町の文化財保護の現状と課題」と題したレクチャーを受けた。箱根町には国指定の文化財もあ



小田原城址を歩く



箱根・旧東海道杉並木を歩く



旧街道石畳を踏破して

り、文化庁などとの打ち合わせなどで多くの時間が割かれるほか、町の予算で文化財を保護することの難しさなどが語られた。午後、バスで元箱根に行き、小雨降るなか旧東海道の杉並木や石畳の保全状況を観察した。箱根関所を教員の説明で見学し、バスでこの日の宿泊先がある静岡県三島市に向かった。

#### 4日目

午前に宿泊先から徒歩で三島大社に行き、参詣ののち宝物館や国指定天然記念物の金木犀を見学した。その後、バスで元箱根に戻り、海賊船・ロープウェー・ケーブルカーを乗り継いだ。この間、大涌谷を散策ののち箱根登山鉄道で強羅駅を出て、箱根湯本駅に到着。多くの観光客が訪れていたが、徐々にその数は減少しているという。前日、箱根町教育長から観光客誘致のためのアイデアを出してほしいと要請があったことの意味を再確認して解散した。

## 5 事後学習

事後学習は、9月20日（土）4時限目に実施した。今回のフィールドスタディで学んだことを総括した。



箱根町教育委員会で講義を受ける

このなかで、各自治体が文化財保護や歴史的環境保全の課題を数多く抱えながらも、現実問題として限られた予算により、その保全にも限界があるという難しさを課題としてあげ、そういった制約のなかでやることをやっているという現実があることも確認した。また、今回の課題を達成するためには、観光客のマナー啓蒙活動や市民・NPOなどとの協働の重要性についても意見交換した。そのほか、参加者から箱根町における歴史的環境保全のためのアイデアを発表してもらい、さまざまな意見が出された。

## 6 雑感

毎年のフィールドスタディで感じていることだが、晴天用のコースだけでなく、雨天用のコースを考へておくことがいかに重要であるかを改めて考えさせられた。今回も、1日目の終盤に雷雨に見舞われ、少しばかり予定通りにはいかなかったが、貸切バスを利用できたことで車中からコースを回ることができたことは幸いであった。また3日目も小雨に見舞われたが、4日目のコースに変更することで乗り切ることができた。

## 学生の声

### 散歩からの気づき



3年 水谷 美月

「歴史的環境の保全を考える」をテーマに小江戸と言われる川越、戦国時代関東支配の要であった小田原、そして現在までも温泉地として観光の名所となっている箱根に行ってきました。実際に街や博物館をみて回ることによって当時の様子や、現在の町との共存について考えることが出来ました。実際に、保全活動に携わっている方々のお話を聞いて、箱根町では保全をしつつ観光客を集めるためのアイデアをみんなで出しました。「環境を守る」「歴史を遺す」わたしは当たり前のことだと思っていました。しかし、お話を聴いたり、目の当たりにすることでそれは難しいことで、国や自治体はもちろん、そこに住む人々、観光客にいたるまで大勢の協力が必要なことなのだと思いました。そのためにはその歴史的環境の大切さや意義を多くの方に知ってもらい納得してもらうことが重要であることを学びました。とまあ勉強したことを書いてみましたが、いっぱい歩いて、遊んで、学んで、食べて！とにかくたのしい4日間でした。

# 持続可能な地域社会への挑戦！～世界遺産のまち、過疎の山村、小都市の歴史的町並みを手がかりとして

担当教員名 小島 聡／朝比奈 茂

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月18日～20日、26日
場 所	富士河口湖町、小菅村、香取市
参加人数	24名

## 2 コースの目的

「持続可能な地域社会」という理念はすべての地域に共通しますが、望ましい社会像や、現実的な課題、実践は多様です。

そこでこのコースでは、世界遺産に登録された富士山の麓のまちである山梨県富士河口湖町、同じ山梨県内にある多摩川源流域の小菅村、歴史的町並み保全とともに観光のまちづくりを進める千葉県香取市という、3つの異なる地域を訪問しながら、それぞれの「持続可能な地域社会」への挑戦を比較し、共通点と特性を考えることを目的にしました。

## 3 事前学習

事前学習は2回行いました。1回目は、まず、グループディスカッションを行い、なぜこのコースを選んだのか、このコースで何を学びたいのかという参加者の初期的な問題意識を共有しました。その上で、コースの趣旨と概要を確認した後、3つの地域のプロフィールと、それぞれの持続可能性に関する課題について講義し、地域の映像も観ました。

2回目は、各人が、興味深い事実、現地で確認したい事項（フィールドに対するそれぞれの問い）を、インターネットで事前調査し、ワークショップ方式で共有を図りました。

## 4 行程

### 1日目

まず山梨県立富士ビジターセンターを訪問し、県の職員である富士山レンジャーから、世界遺産登録後の観光客の急増とそれに伴う諸課題（登山者の安全、廃棄物やトイレなど環境問題など）と、国立公園としての全般的な対策、レンジャーの役割について講義を受けました。その後、ビジターセンター内の研修用散策路でガイドを受けながら富士山トレッキングを体感しました。

次に、廃棄物問題を中心に富士山の環境問題に取り組んできたNPO 法人富士山クラブのオフィスで講義を受けた後、不法投棄現場で廃棄物の撤去作業を体験しました。

夜は、法政大学富士セミナーハウスで、昼間にお世話になった方々から、さらにお話を伺いました。

### 2日目

午前中は、富士山クラブの講義の後、富士山周辺の人々の暮らしの原風景を知るため、昭和の頃に土石流で消滅した集落を復元した「西湖いやしの里根場」を訪問しました。

午後は、多摩川源流域の持続可能性を考えるため、山梨県小菅村に移動し、NPO 法人多摩源流こすげのオフィスで、村づくりとNPOの役割について講義を受けました。その後、山村内を散策しながら、地域の風景資産ともいえる山の斜面のこんにゃく畑では農家の方にお話を伺い、さらに多摩川源流の風景を象徴するスポットを数カ所訪れました。

さらに村営温泉に行き、夜は、NPO や村役場の若手のみなさんと学生の懇談会を開催し、村の現在と未来に対する若い世代の想いを伺いました。

### 3日目

午前中は、村民の健康づくりに少しでも貢献するため、住民と学生と一緒に体力測定を行い、その後、高齢者のみなさんは担当教員（朝比奈）による健康セミナーを受講し、子どもたちは大学生とドッジボールで交流しました。

午後は、役場で、担当教員（小島）が、むらづくりを担う職員のみなさんと、「次の世代につなぐ小菅村の



不法投棄現場で撤去作業の体験



西湖の復元集落にて

未来と人づくり」についてパネルディスカッションを行い、学生は若手職員とともに聴衆として参加しました。また帰り際、村の観光物産館を見学し、学生たちは特産物を購入しました。

#### 4日目

江戸時代からの「江戸優り」というシビック・プライド（市民の誇り）をエネルギーとした地域プロデュースと、東日本大震災からの復興観光を体感するために、午前中は、重要伝統的建造物群保存地区である香取市佐原地区でオプションツアーを行いました。町並み交流館も訪問し、川沿いの観光資源のイタリアンレストランで、法政 FS スペシャルランチを味わった後、伊能忠敬記念館を見学、さらに歴史的町並み保全と観光まちづくりについて講義を受けました。

## 5 事後学習

事後学習は、各人がコースのテーマについてレポートを持ち寄り、グループディスカッションと全体ディ



歴史的町並みを散策



イタリアンレストランで法政 FS スペシャルランチ

スカッションで共有しました。最後に、3つの地域を比較した知見について総括講義を行いました。

## 6 雑感

事後学習で伝えましたが、このコースの最も重要なメッセージは、今回、訪問したような様々な地域＝フィールドでの学びを通して、法政大学人間環境学部が立地する巨大都市東京と、自分が住んでいる地域の持続可能性を考える視点を身につけることです。ですから、参加した学生には、このコースを大切な機会にしてほしいと願っています。



小菅村の若い世代との対話

## 学生の声

### 机上では得られない



1年 松野 隼人

今回のフィールドスタディでは、山梨県の富士河口湖町周辺地域と小菅村、そして千葉県香取市という3つのまちを訪ねました。抱えている問題や、置かれている状況が異なる3つの地域を比較し、それぞれの街で課題の解決につながる答えを考える事がこのFSの目的でした。

まず私たちは、それぞれのまちが抱えている課題を明確にすることから始めました。地域の方々のお話を直接聞き、実際に自分たちの足でまちを見てまわることによって、そのまちが抱えている課題を適切に捉えることができました。また、地域の方々と直接意見交換を行うことによって、それぞれのまちが抱える課題のための対応を地域の方々とともに考えることができました。

私はFSで、普段の講義では決して得ることのできない体験をさせていただきました。この文章を読んでいるあなたも、ぜひFSに参加してみてください。きっとかけがえのない時間をすごせると思います。

# 環境と文化の都市・飯田のまちづくり、 地域の伝統芸能と社会

担当教員名 安藤 俊次／石神 隆

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月8日～11日
場 所	長野県飯田市ほか
参加人数	50名

## 2 コースの目的

旧城下町である飯田市は、人口約10万人の自然豊かな地方都市です。ここでは人形劇とリング並木を愛し、エコツーリズムを推進する南信州の環境文化都市として有名です。当フィールドスタディでは、人形劇フェスティバルへの参加を通し、また、環境重視のまちづくりをめざす飯田市の政策や活動を多方面から学ぶことにより、新しい地域のあり方を考えます。

さらに伝統的な芸能を鑑賞、妻籠（つまご）および馬籠（まごめ）地域の伝統的町並みを視察することにより、文化の伝承と地域づくりを総合的体験的に学習していきます。

## 3 事前学習

飯田地域の自然、文化、社会について、資料や映像を用いての学習。伝統芸能などの背景や鑑賞の仕方なども学びます。

## 4 行程

### 1日目

- 朝 東京発（全行程 貸切バス）諏訪インター経由
- 午後 伝統的建造物群保存地区（旧中仙道宿場町、妻籠宿および馬籠宿）のまち歩き学習
- 夜 現地オリエンテーションおよび自由研修

### 2日目

- 午前 まちづくり講義（飯田市長、および人形劇フェスタ主催者の講演）（他大学のフィールドスタディと合同）
- 午後 飯田市中心部 まち歩き、人形劇フェスティバル見学
- 夜 りんごん祭り（町ぐるみ夜踊り）に大学連として参加

### 3日目

- 午前 まちづくり講義（市議会議長、自然エネルギー会社社長）
- 午後 伝統的芸能「人形浄瑠璃」の鑑賞（今田人形の館にて）
- 夕刻 遠山郷（山間部）に移動、山間地域の食文化等学習

### 4日目

- 朝 遠山郷の民俗・文化探索（旧街道、旧小学校ほか）
- 昼 そば打ち実習（昼食）、伝統産業（水引工芸）見学
- 夕刻 東京着

## 5 事後学習

各人が作成したレポートに基づきそれぞれ報告、現地学習の成果や、今後の地域学習の展望をディスカッションしました。

## 6 雑感

飯田地域は地域史や伝統文化の宝庫で、汲めども尽きない興味深い地域で様々な学びの場です。本フィールドスタディを通じて、参加者各人の中に、地域という対象への深い関心や、それへの愛着、また地域を見る眼が養われたようです。



飯田りんごん祭りに参加



飯田山間部の遠山郷にて



伝統芸能鑑賞、出演は全て米国人

# 東京いー散歩

担当教員名 後藤 彌彦

## 1 コースの概要

日 程	2014年9月2、4、9、11日
場 所	東京官庁街、下町、山の手
参加人数	14名

## 2 コースの目的

現在の東京は、徳川家康の江戸の街作り、明暦の大火後の川向こうへの拡大、明治の地区改正、大正の関東大震災、戦後の焼け野が原からの復興を経て形作られた。これらを念頭に置いて、江戸と東京の歴史的・文化的遺産、河川、都市の緑を訪ね、東京の成り立ちと都市づくりに際して環境と防災の観点が大切であることを学習し、今後の都市環境、都市の緑等を考えることが目的である。

## 3 事前学習

配付資料とビデオにより、東京の都市形成の歩みを学ぶ。

ビデオは、上野寛永寺、明暦の大火と回向院、震災復興、ヒートアイランドに関するものである。

さらに、予習に必要な参考書が紹介される。

## 4 行程

### 1日目

地下鉄虎ノ門駅に集合し、琴平神社、霞が関ビルを経て、昭和初期の官庁計画による旧文部省ビルで旧大臣室などを見学する。次に国会、国会前庭、桜田門など遠望しながら、明治の官庁集中計画による旧法務省庁舎の中の法務資料展示室を見学する。農林水産省食堂で昼食ののち、日比谷図書館（千代田区の都市形成に関する展示）、日比谷公会堂をみてから、日本初の西洋式庭園である日比谷公園を散策した。

### 2日目

地下鉄清澄白河駅に集合し、深川江戸資料館で江戸の暮らしを学んだのち、清澄庭園を訪ね、大名屋敷から富豪の邸宅を経て現在は都市の緑の拠点となる歴史を学ぶ。パン工場での昼食の後、隅田川に沿って散策、気象緩和など都市における川の働きを考えながら、清洲橋などの景観を楽しむ。終わりに明暦の大火に関係

する回向院を訪ねた。

### 3日目

JR 上野駅に集合し、上野公園から不忍池を経て、旧岩崎庭園でコンドル設計の明治期の洋館建築を見学する。東大構内を散策し、東大赤門や昭和初期の校舎建築をみるとともに昼食をとる。菊坂で樋口一葉の足跡を訪ね、水道歴史館で江戸から現在にいたる水道を学び、終わりに震災小公園元町公園を訪ねた。

### 4日目

JR 王子駅に集合し、音無親水公園を経て徳川吉宗以来江戸東京庶民の花見の場であった飛鳥山公園を歩く。隣接する渋沢栄一の屋敷跡を訪ね、西ヶ原一里塚をへて旧古河庭園で和洋の調和した庭園を散策する。女子栄養大学食堂で昼食ののち、染井の里、染井墓地を経て、西ヶ原ふれあい公園へ向かう途中で風雨が激しくなり、切り上げることにした。

## 5 事後学習

関東大震災からの復興に関する後藤新平のビデオでおさらいしながら、FS の印象について意見交換する。



旧文部大臣室にて



旧岩崎庭園にて

# 演劇ワークショップ：インプロヴィゼーションを学ぶ

担当教員名 平野井ちえ子

## 1 コースの概要

日 程	2014年2月14日～17日
場 所	アートカフェ百舌（小劇場）
参加人数	10名

## 2 コースの目的

入門的な演劇ワークショップに参加することで、コミュニケーションをめぐる感性や想像力を磨き、舞台芸術に関する鑑賞眼・表現力・創造力を養う。

## 3 事前学習

インプロヴィゼーションの性質上、体験の場での即時性や発見が重要なので、事前講義は最小限にとどめた。参加者が「演劇ワークショップ」に対してもっているイメージを交換し、その一例として平田オリザの「演劇ワークショップ」について簡単な講義を行なった。最後に、ワークショップ講師の奥野晃士氏と所属劇団のSPAC（静岡県舞台芸術センター）について紹介し、服装や心構えなど、ワークショップ受講上の注意も確認した。

## 4 行程

### 1日目

ウォーミングアップ（「シェイクハンド」、「わたし・あなた」）、感情の解放訓練、ゲーム（「エアハンカチ落とし」、「名前鬼ごっこ」）、魅せる身体づくり方（心身統一合気道、スズキ・トレーニング・メソッド入門）、インプロヴィゼーションの基礎（言葉を用いた即興劇における「アクセプト」の実践：「ワンボイス」、「ワンワード」、「シェアード・ストーリー」）

### 2日目

ゲーム（「フルーツゲーム」、「ミラー」、身体で形をつくる、「彫刻ネーミング」、「サンキューゲーム」）、魅せる身体づくり方（「静」の身体存在感：心身統一合気道、スズキ・トレーニング・メソッド入門）、「リーディングカフェ」（小田島雄志翻訳によるシェイクスピアの『夏の夜の夢』と野田秀樹潤色版『真夏の夜の夢』の本読み比較。）

### 3日目

ゲーム（「ジップ・ザップ・ソップ」、「ミラー」、「エクステンド&アドバンス」、「プレゼントゲーム」）、腹式呼吸と発声、『夏の夜の夢』のバックのエピローグを用いたスズキ・トレーニング・メソッド入門、奥野講師の主演舞台『イワーノフ』ハイライト鑑賞、インプロヴィゼーションの基礎（「ペーパーズ」、「スペースジャンプ」）

### 4日目

ワークショップ最終日：午後は成果発表会  
歌を用いたスズキ・トレーニング・メソッド入門、ゲーム（「イエスレッツ」、「社長ゲーム」）、そのほか午前中は発表会のリハーサル。発表会は、「解放訓練」→「わたし・あなた」→「ミラー・ダンス」→「ペーパーズ」→「スペースジャンプ」→「スズキ・トレーニング・メソッド入門」で構成し、参加者の友人等を観客に招いた。座談会で、4日間の体験と成果をふりかえった。

## 5 事後学習

コミュニケーションの基礎を育む簡単なゲームから最終日の発表会での即興劇づくりまで、上達のプロセスをハイライトの映像でふりかえってディスカッションを行なった。各自の日記とエッセイも全員で交換し、インプロヴィゼーションを中心とする演劇ワークショップが体験できたことを確認した。

## 6 雑感

とくに言語によるコミュニケーションが活発になった。ぜひとも学生生活や将来に役立ててほしい。今回は男子学生が多いのが意外だった。演劇ワークショップとジェンダーバランスの関わりも興味深い。



最終日発表会での即興劇の一コマ

# 演劇ワークショップ：

## 「スズキ・トレーニング・メソッド」を学ぶ

担当教員名 平野井ちえ子

### 1 コースの概要

日 程	2014年9月10日・11日／12月18日
場 所	芸能花伝舎（9月）／吉祥寺シアター（12月）
参加人数	16名

### 2 コースの目的

世界の演劇人が注目する「スズキ・トレーニング・メソッド」の初歩を体験し、演劇表現のための身体訓練を学ぶ。コミュニケーションに必要な感性や演劇作品に対する鑑賞眼を養う。

### 3 事前学習

(1) 日本の現代劇の流れを講義。(2) ギリシア悲劇『トロイアの女』の一幕と終幕の一部の本読みを体験。(3) 鈴木忠志氏演出『トロイアの女』の舞台映像を一部紹介。(4) 劇団 SCOT と劇団員でワークショップ講師の木山はるか氏について紹介。(5) ワークショップ受講上の注意。(6) 希望者には、ワークショップ終了後も、数回に分けて『トロイアの女』の物語に親しむためのティーチインを行なった。

### 4 行程

#### 1日目

スズキ・トレーニング・メソッドの入門として「訓練1」と「訓練2」を学ぶ。「訓練1」は力強く床を踏みしめる足踏みであり、踏んだ震動が上半身に上がるのと闘って重心を一定に保たねばならない。「訓練2」はゆっくりした一定の速度で美しく緊張感のある水平移動を見せる歩行訓練である。いずれも自らの身体の重心を意識し、対象に向かって迷わず前進する訓練であり、一定の速度、一定の呼吸、一定のエネルギーを保たねばならない。「訓練1」は基本動作を、「訓練2」は手の動きをつける前の段階までを、それぞれ学習した。午後には、NHK 訪問インタビューの収録映像である「足踏みがよびおこすもの」で、鈴木忠志氏本人による「スズキ・トレーニング・メソッド」の解説を聴いた。また、舞台映像『ディオニュソス』を第4場（ペンテウス殺し）まで鑑賞し、訓練が舞台にどのように生きているかを

考えた。

#### 2日目

「訓練1」と「訓練2」のマスターを目ざす。「足踏み」は音楽の終わりに合わせて一斉に終了することが難しく、繰り返し訓練を受けた。「訓練2」は、足の動きに加え足と等速度の手の動きもつけて行なう。手の動きがつくことで、重心が不安定になりやすいことがわかる。いずれの訓練も単純な動きではあるが、上手になると美しい型になっていく。何度も繰り返すことで、自分の身体の弱点を見つけることができる診断でもある。午後には、NHK 訪問インタビュー「利賀山房・わが劇的空間」で、鈴木忠志氏の劇場についての考えを聴いた。また、舞台映像『四か国語版・リア王』を1幕10場（荒野のリアの冒頭）まで鑑賞し、訓練が舞台にどのように生きているか、新利賀山房の空間がどのような空気を醸し出しているか考えた。

#### 3日目

『トロイアの女』の吉祥寺シアター公演の最終舞台稽古見学に参加した。これは、「演劇人のための鈴木教室」のプログラムでもある。本公演と同じ流れで見学でき、鈴木忠志氏の解説やフロアとの質疑応答もあり、本公演以上に実りの多い経験であったことは間違いのない。『トロイアの女』は鈴木氏の初期の作品であるため、スズキ・トレーニング・メソッドが色濃く用いられていて、ワークショップ講師の木山氏も出演していたため、9月に訓練を受けた参加者たちは、真剣なまなざしで舞台に見入っていた。

### 5 事後学習

ワークショップと観劇で得た学びについて、全員の日記とエッセイをシェアしてディスカッションを行なった。観劇だけでは到達できなかったであろう鋭い観察もあり、ワークショップの効果を実感した。



力強いステップの歩行訓練1



静かな迫力の歩行訓練2

# 科学博物館で学ぶ

担当教員名 谷本 勉

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月～2014年10月
場 所	各地の科学博物館
参加人数	12人

## 2 コースの目的

「科学博物館で学ぶ」は、グループ学習ではなく、あくまで原則個人参加のコースであり、各自がそれぞれの博物館でどのような企画・セミナーが計画されているかを調べ、参加するイベントを決定し、大学外の現場（フィールド）で環境問題等を学習することを目的とする。

## 3 事前学習

最初の説明会において詳細な実施要領を解説する。その後、各自が作成した事前の学習計画書を提出し、担当教員の指導を通して、参加するイベントについての理解を深める。

## 4 行程

1つのテーマが4時間以上のものを1日分の学習として認め、それ以下のものを半日分として、合計4日分の学習をすることを義務づけている。

たとえばSさんの場合は以下のような日程で学習した。

### 8月15日「国立科学博物館」

学習のテーマ：夜の天体観望公開

学習の目的：土星や二重星、星団、星雲を自分の目で観察し、構造を学ぶ。普段は天体観測をする機会がありませんので、この機会に少しでも宇宙について学び、考えたい。

### 8月21日「国立科学博物館」

学習のテーマ：菌類研修会

学習の目的：高校で学んだ基礎知識と照らしあわせながら菌類について学び、理解する。

### 8月31日「千葉県立中央博物館」

学習のテーマ：魚図鑑の写真撮影法

学習の目的：プロの生物カメラマンから生き物の正しい撮影方法を学ぶとともに、魚への知識も深める。こ

れをきっかけに生き物の様々な写真を撮影できるようになりたい。

### 9月7日「千葉県立中央博物館」

学習のテーマ：「カヤツリグサ科入門図鑑」の使い方

学習の目的：生態園でカヤツリグサやその他の野草に親しみ、今まではあまり意識しなかった植物たちに視点を向ける。

### 9月13日「千葉県立中央博物館」

学習のテーマ：水槽栽培の水生植物を触って比べよう

学習の目的：水槽栽培の仕方や水生植物の育て方を学ぶ。家のメダカの水槽に入れる水草の参考にしたい。

### 9月14日「国立科学博物館」

学習のテーマ：ワットの蒸気機関を読み解く

学習の目的：ワット自身が書いた特許の文面を実際に見て、読むことによってより理解を深める。

## 5 事後学習

参加したすべてのイベントについて、事後に学習報告書を提出し、担当教員の講評を通して、参加したイベントについての理解を更に深める。

## 6 雑感

参加するイベントを決定するまでが大変で、この段階で参加希望者の半分近くが挫折する。参加人数12人は最終的にやり終えた人の数である。個人参加の自由にはそれなりの責任と困難が伴うということである。



魚図鑑の写真撮影法①  
撮影前のカガミダイと標本用の針



魚図鑑の写真撮影法②  
全てのひれをきれいに伸ばしたら、針で体をとめる  
「きれいに撮れたかな？」

## 1 コースの概要

日 程	2014年8月28日～9月11日のうち 4日間
場 所	東京都内
参加人数	12名

## 2 コースの目的

科学技術の現況を把握しそのあり方を考察します。特に資源・廃棄物あるいはエネルギーに関わる問題について取り上げ、リサイクルや水資源、電力生産に関わる取り組み・業務を行っている現場を訪ねます。その角度から「人間活動」と「科学技術」について考察していきます。

## 3 事前学習

廃棄物処理とリサイクル、下水処理（水再生）と高度浄水処理、清掃工場とゴミ発電、最終処分地の現況調査などに関わる事前学習と調査を進めるためのコース設定について打ち合わせをおこなっています。

## 4 行程

### 1日目

8月28日

- 成友興業（株）視察（がれき・泥土類のリサイクル）
- アルフォ（株）視察（食品廃棄物のリサイクル）
- 東京臨海リサイクルパワー（株）視察（ガス化溶融炉等発電）

### 2日目

9月4日

- 東京都水道局金町浄水場視察（水資源と循環、オゾン発生装置による高度浄水技術、コージェネレーションの有効性、太陽光発電など再生可能エネルギーについて）
- 大学内での検討会（地球における水の循環とその役割、炭素循環のメカニズム、リサイクルの考え方と熱力学、エントロピー、発電効率などについて）

### 3日目

9月9日

- 東京都下水道局芝浦水再生センター視察（下水処理の

技術、中水利用の可能性と循環型都市などについて）  
○新江東清掃工場（東京23区清掃一部事務組合）視察（ゴミ発電と科学技術、スラッグの生産、廃棄物の焼却と最終処分地などについて）

### 4日目

9月11日

- フューチャー・エコロジー（株）視察（廃情報機器のリサイクル）
- 高俊興業（株）視察（建設系混合廃棄物とリサイクル）
- 日本環境安全事業（株）視察（PCB 廃棄物の処理）
- 中央防波堤埋立地の視察（最終処分地の現況について）

## 5 事後学習

4日間の振り返りと参加者間での意見交換をおこなっています。廃棄物の焼却におけるローカルメリット（最終処分量削減）とグローバルデメリット（炭素排出）をどのように考えるか？リサイクル（マテリアル、ケミカル、サーマル）の熱力学的な有効性は？人間にとっての科学技術のあり方は？などについて考察を加えています。

## 6 雑感

環境問題を考察するにあたっては「地球システム」と「人間活動（人為）」そして「自然法則」を意識することが必要性であることを実感しています。廃棄物・リサイクル・エネルギーに関する様々な取り組み事例に接することで、それらの現況の一端が理解され、同時に様々な課題も把握できたように思います。なお、このフィールドスタディにおける1日目と4日目については東京都環境局で主催している東京スーパーエコタウン見学会に参加して実施されたものです。



東京湾・青海方面から中央防波堤埋立地(最終処分場)を見えています。高く積まれた堆積物が印象的です。

# 伊豆大島の魅力発見 ～フィールドワーク事始め～

担当教員名 安岡 宏和／杉戸 信彦

## 1 コースの概要

日 程	2014年9月1日～5日
場 所	伊豆大島
参加人数	31名

## 2 コースの目的

産業・自然・観光をテーマとして、フィールドの人びとと話し、自然環境を体験することをとおして、伊豆大島の魅力を発見する。そのうえで大島の課題について考え、その課題を自分の取り組むことのできる具体的な設問に落とし込むプロセスを学ぶ。

## 3 事前学習

事前学習では、現地で見聞きする個別的・具体的な事柄や出来事を、大きな問題意識と関連づけながら把握するための準備として、さまざまな社会的課題をとりあげてグループディスカッションをおこなった。また、2013年10月に発生した大規模な土砂災害について、地図等を活用しながら被災範囲・規模を確認した。

## 4 行程

### 1日目

21:30 東京港集合。

23:00 伊豆大島への夜行船便発

### 2日目

5:00 伊豆大島岡田港着。午前中は大島町郷土資料館を訪れ、館長さんに伊豆大島の自然と文化について概要を話していただいた。午後は、大島町役場の産業観光課の方に伊豆大島の観光の現状および昨年の土砂災害後の復興状況について、ついで大島牛乳株式会社の社長さんに大島における牛乳生産の歴史と課題について、お話をうかがい、議論をおこなった。

### 3日目・4日目

終日、あらかじめ決めておいたグループに分かれて、大島各地を訪れ、大島の魅力と課題について「気づき」を収集した。夕方のミーティングにて、その日の行動について班ごとに報告し、それぞれの「気づき」を共有した。

### 5日目

午前中は、元町地区にて土砂災害現場を踏査した。伊豆大島では、火山島ゆえに、火山災害や土砂災害が繰り返し発生してきた。踏査では、事前学習での作業をベースとして、土砂の流下した範囲を現地で確認し、地形や地層を随所で観察しながら、大島の成り立ちや土砂災害のメカニズムを検討した。

踏査をとおして、災害軽減には、地域の自然的個性、砂防堰堤などのハード面、消防団などのソフト面など、自然と社会全般を見わたして考えるプロセスが重要であることが確認できた。

12:30 現地解散。

## 5 事後学習

班ごとに、フィールドでの「気づき」を軸にしながら大島の魅力と課題についてまとめ、15分の報告をおこなった。さまざまな観点から大島の自然や文化の魅力について報告がなされたが、一方で、そのような魅力をつくりだしている火山島であると環境条件が、噴火や土砂崩れの誘発といったかたちで災害の要因にもなっている事実を認識した。また、後期に開講される「フィールド調査論」を履修した学生は、フィールドスタディでの「気づき」をもとに、研究課題として練り上げるプロセスを学んだ。



大島牛乳株式会社の社長さんに大島における牛乳生産の歴史について説明を受けているところ

# 奄美大島の自然環境・地場産業・歴史文化を学ぶ

担当教員名 長谷川 直哉

## 1 コースの概要

日 程	2014年9月8日～11日
場 所	鹿児島県奄美群島（奄美大島）
参加人数	33人

## 2 コースの目的

奄美大島の自然環境・地場産業・歴史文化を学ぶことで、離島に生きる人々の価値観や地域社会のサステナビリティを考えます。

## 3 事前学習

事前学習では、奄美群島の今をより深く理解するために、江戸時代における薩摩藩との関係や大島紬やサトウキビ栽培などの地場産業の発展プロセス、第二次世界大戦後のアメリカ占領時代から本土復帰に至る経緯、本土付記以降の社会・経済の動向を学びました。

## 4 行程

### 1日目

午後、奄美大島空港に集合後、原ハブ屋にて奄美大島の自然と生態系におけるハブの位置づけに関する講演を聴講し、島民の生活とハブの共生関係について学習しました。夜は、ばしゃ山村にて郷土料理である「鶏飯」を体験し、自己紹介等を通じて参加メンバー間の交流を深めました。

### 2日目

午前は鹿児島県立大島高校を訪問し、高校生約50名との交流会・ミニオープンキャンパスを実施しました。高校生との進路に関する対話を通じて、参加メンバー自身が大学生活で何を学びたいのか、将来の目標は何かなど、自分自身を見つめ直すきっかけを得ることができました。父兄や教員の皆さんとも意見交換を行いました。午後は地場産業である大島紬の生産現場を訪問し、作業工程を見学しました。世界三大織物に数えられる大島紬の生産工程、高度な技術の一端を学ぶとともに、生活様式の変化による大島紬のマーケティングの課題について議論しました。その後、奄美パークを訪問し、奄美大島の自然・歴史・文化について展示物や動画を通して学びました。夕刻は大浜海岸にて海

水浴とバーベキューを堪能し、年次を超えた交流を図ることができました。

### 3日目

奄美大島の南西に位置するマングローブパークにてカヌーを使ってマングローブの原生林を見学し、奄美大島特有の自然を感じることができました。午後は半潜水船「せと」に乗船し、奄美大島と加計呂麻島間の大島海峡でさんご礁を見学しました。200種ともいわれるサンゴの生息する海中景観は想像を超える素晴らしさでした。その後、高知山展望台から奄美大島や加計呂麻島を一望し、改めて奄美大島の豊かな自然の尊さを実感しました。夕刻は地場産業として重要な黒糖焼酎を生産する富田酒造を訪問し、社長の説明を通じて黒糖焼酎の歴史と文化に触れることができました。また、小規模ながらも伝統的な製造スタイルを維持することで付加価値を高めるビジネスモデルを展開する同社の戦略を学びました。

### 4日目

午前は名瀬市内の中心商店街の見学、初日に訪れたばしゃ山村にて地元の方との交流や郷土品に触れるなど、各自奄美大島での学びの振り返りを行いました。昼食後に現地解散となり、フライト時刻まで時間の許す限りマリンスポーツを堪能しました。

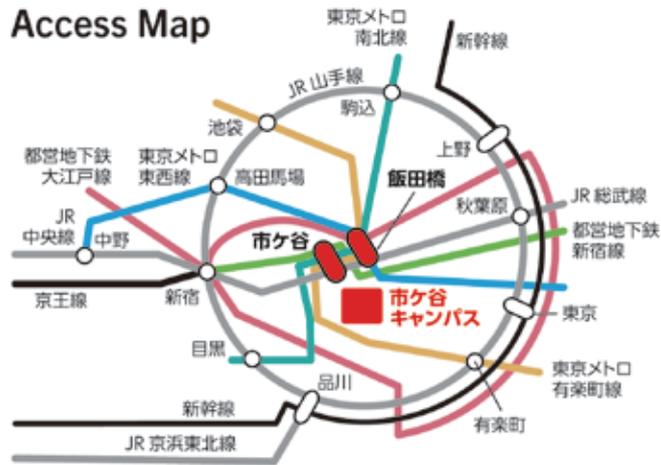
## 5 事後学習

事後学習では見学した施設や体感したことについて、メンバー全員が3分間スピーチを行いました。また、①離島に生きる高校生の生き方と自分の人生、②高い技術を持つ伝統産業のブランド化と成長戦略、③奄美大島の観光産業の課題と将来像、④生態系の維持と経済成長、⑤日本社会のサステナビリティと離島の関係性、などをテーマに各自レポートを作成しました。



カヌーに乗ってマングローブ原生林の散策

## Access Map



- |       |        |                    |
|-------|--------|--------------------|
| J R 線 | ● 総武線  | 市ヶ谷駅または飯田橋駅下車徒歩10分 |
| 地下鉄線  | ● 新宿線  | 市ヶ谷駅下車徒歩10分        |
|       | ● 有楽町線 | 市ヶ谷駅または飯田橋駅下車徒歩10分 |
|       | ● 東西線  | 飯田橋駅下車徒歩10分        |
|       | ● 南北線  | 市ヶ谷駅または飯田橋駅下車徒歩10分 |
|       | ● 大江戸線 | 飯田橋駅下車徒歩10分        |

# 法政大学

## 人間環境学部

〒102-8160 東京都千代田区富士見2-17-1

TEL.03-3264-9327

<http://www.hosei.ac.jp/ningenkankyo/>

法政大学 人間環境学部

検索



### グリーン・ユニバーシティをめざして

法政大学では1999年3月人間環境学部の創設と同時に「環境憲章」を制定し、持続可能な社会の実現をめざす「グリーン・ユニバーシティ」宣言をしました。1999年9月に総合大学としては日本で初めてとなる“ISO14001”（環境マネジメントシステムの国際規格）の認証を取得し、大学の環境改善活動を開始し、環境教育の推進、ゴミの削減・省資源・省エネルギーを継続して実行しています。

人間環境学部ではこの環境マネジメントシステムについて学ぶ講義も設けています。

